

ダニエル書 - 第八十番

異象の終わり始まり：1884年におけるエレン・ホワイトの最後の公の異象とその意義

Jeff Pippenger

2024-02-13

1884年、エレン・ホワイトは最後の公開の幻視を与えられた。それはオレゴン州ポートランドで与えられた。彼女の最初の公開の幻視は1844年、メイン州ポートランドで与えられた。イエスはいつも、物事の終わりを、その始まりによって示す。

1844年、期日が過ぎて間もなく、私に最初の異象が与えられた。私はポートランドのヘインズ夫人を訪ねていた。彼女はキリストにある愛する姉妹で、その心は私の心と固く結び合わされていた。女ばかりの私たち五人は、家庭の祭壇の前に静かにひざまずいていた。祈っている間、これまでに感じたことのないほどに、神の力が私に臨んだ。

私は光に包まれ、地上からますます高く昇っていくように感じた。私は世の中で再臨を待ち望む人々を探そうと振り向いたが、見つけることができなかった。すると声が私に言った。「もう一度見なさい、もう少し高いところを見なさい。」そこで私は目を上げると、世界のはるか上に築かれた、まっすぐで狭い道が見えた。この道の上を、道の遠い端にある都へ向かって、再臨を待ち望む人々が進んでいた。彼らの背後、道の初めには明るい光が据えられており、天使はそれが「真夜中の叫び」だと私に告げた。[マタイ25章6節参照。] この光は道の全体にわたって輝き、彼らがつまずかないように足もとを照らしていた。

彼らの目の前におられて都へと導いておられるイエスから目を離さなければ、彼らは安全であった。だがまもなく、何人かは疲れ、都のはるか遠くにあり、自分たちはもっと前にすでにそこへ入っているはずだと期待していたと言った。そのときイエスは、栄光に満ちた右の御腕を挙げて彼らを励まされ、その御腕から光が出て再臨の一団の上を揺らめきながら覆い、彼らは「ハレルヤ！」と叫んだ。ところが、ほかの者たちは軽率にも背後の光を否定し、ここまで自分たちを導いたのは神ではないと言った。すると背後の光は消え、彼らの足もとは全くの暗やみとなり、彼らはずまずいて目標とイエスを見失い、道から外れて下の暗く邪悪な世へと落ちていった。『エレン・G・ホワイトのキリスト教的経験と教訓』57頁。

孫のアーサー・L・ホワイトが執筆したエレン・ホワイトの全6巻の伝記には、1893年のゼネラル・カンファレンス総会でジョン・ラフバラが述べた発言が記録されている。

9年後のゼネラル・カンファレンス総会で講演した際、ラフバラは次のように述べた。「私はホワイト夫人が幻視状態にあるのを約50回見た。最初は約40年前だった。……彼女の最後の公開の幻視は1884年、オレゴン州ポートランドのキャンプ場でのことだった。」エレン・ホワイト伝 第3巻、256。

彼女は1884年以降も夢や幻視を見続けたが、公の場で起こった幻視は始まってからちょうど40年後に終わり、その最初と最後の公の場での幻視はいずれもポートランドという名の都市で起こった。最初の都市はアメリカ合衆国の東海岸に、最後の都市は西海岸にあった。これを単なる人間的な偶然にすぎないと主張したい人もいるだろうし、一方で、公の場での幻視の目的は果たされたので、主が開始から40年でそれらを終わらせたのだと主張する人もいるだろう。

実際の理由は、ミラー派運動に与えられていた預言の賜物に対する不従順と反逆が増大していたためである。

オークランドに来てから、私はバトルクリークの状況を思って心が重くなり、弱く、あなたがたを助ける力がありませんでした。不信のパン種が働いているのを知っていました。神の言葉の明白な戒めを無視していた者たちは、その言葉に注意を払うよう促す証言も無視していました。昨冬ヒールズバーグを訪れていたとき、私はひたすら祈り、心配と悲しみの重荷に押しつぶされていました。しかし、あるとき祈っていると、主が闇を払いのけられ、部屋は大いなる光で満たされました。神の天使が私のそばにおり、私はバトルクリークにいるかのようにでした。私はあなたがたの評議の場において、発せられる言葉を耳にし、また、もし神が望まれるなら私の記憶から永遠に消し去られてほしいと思うような事柄を見聞きしました。私の魂は深く傷つき、何をすべきか、何を言うべきか分かりませんでした。いくつかのことは口にすることができません。このことについては誰にも知らせないようにと命じられました。というのも、まだ多くのことがこれから明らかになるからです。

私は、私に与えられた光を集め、その輝きを神の民に放つようにと言われました。私はこのことを新聞の記事で行ってきました。何か月もの間、ほとんど毎朝三時に起き、バトルクリークで最後の二つの証しが私に与えられてから書き留めておいたさまざまな事柄を取りまとめました。これらの事柄を書き記し、急いで皆さんのもとへ送りました。しかし、私は自分自身の適切な養生を怠ってしまい、その結果、重荷に押しつぶされるように倒れました。私の原稿は、総会までに皆さんの手に届くよう、すべてを書き上げることができませんでした。

ふたたび、祈っているときに、主がご自身を現された。私は再びバトルクリークにいた。私は多くの家々にいて、あなたがたの食卓を囲んで交わされる言葉を聞いた。その詳細を今述べる自由は与えられていない。私は、決してそれについて語るよう求められないことを願う。また、きわめて印象的な夢をいくつも見た。

「あなたはどの声を神の声として認めるのか。あなたの誤りを正し、あなたの進路をありのままに示すために、主にはどんな手だてが残されているのか。教会に働くために、どんな力があるのか。もし、あらゆる不確かさの影と疑いの可能性が取り除かれるまで信じることを拒むなら、あなたは決して信じない。完全な知識を求める疑いは、決して信仰に屈しない。信仰は証明ではなく証拠に立脚する。周囲に、私たちに反対の道を追うよう促す他の声が満ちているときでさえ、主は私たちに務めの声に従うことを求めておられる。神から来る声を聞き分けるには、私たちには熱心な注意が求められる。私たちは性向に抗してこれを征服し、駆け引きや妥協なしに良心の声に従わなければならない。さもないと、その促しは絶え、意志と衝動が支配するようになる。聞かず従わないと心に決めてその御霊に逆らってこなかった私たちすべてに、主の御

言葉は臨む。この声は、警告に、勧告に、戒めのうちに聞かれる。それは主がその民に与える光の言葉である。もし私たちが、より大きな呼びかけやより良い機会を待たずなら、その光は取り去られ、私たちは暗闇に置き去りにされるかもしれない。」証言
第5巻 68

ホワイト夫人は、女預言者としての自らの務めに対する反抗がなお続くなら、「光は取り去られ」、ラオデキヤ的アドベンチズムは「暗闇の中に残される」かもしれないと指摘した。1915年に、光は取り去られた。神は、過去も現在も、ご自身が望まれるときにはいつでも、預言者または女預言者を起こすことが十分におできになる。神はエリヤに続く者としてエリシャを起こされたが、1915年以後は「光を取り去られた」ため、生きた預言者は起こされなかった。

ホワイト姉妹の夢と幻については、三つの時期があった。最初の四十年間は、幻は公の場で起こり、それを目撃した人々の心にこの賜物を確立することに資する目的があった。次いで1884年から1915年の死に至るまで、幻と夢は依然として神の民の益のためのものであったが、それらは私的に与えられた。第三の時期は1915年に始まり、ラオデキヤ的アドベンチズムが背教の闇の中にあることを示す証拠を与えた。

古代イスラエルは現代のイスラエルを映し出しており、エリとその二人の息子ホフニとピネハスに代表される全面的な反逆の時代には、「開かれた幻」はなかった。その理由は、彼らの甚だしい不従順と反逆であった。神は変わらない。

エリの家には、さらに別の警告が与えられることになっていた。神は大祭司とその息子たちに語りかけることができなかった。彼らの罪が濃い雲のように、神の聖霊の御臨在を遮っていたからである。しかし、悪のただ中にあっても、少年サムエルは天に忠実であり続け、エリの家への裁きのことばは、いと高き方の預言者としてサムエルに与えられた使命であった。

「そのころ、主の言葉はまれで、明らかな啓示はなかった。ちょうどその時、エリは自分の場所に横になり、目はかすみはじめて、もはや見えなくなっていた。神の箱のある主の宮で、神の灯がまだ消える前に、サムエルも寝ようとして横になっていたとき、主はサムエルを呼ばれた。」その声をエリのものだと思い込んだその子は、祭司の寝床のそばへ急いで行って言った。「はい、ここにおります。あなたがわたしをお呼びになったからです。」答えはこうであった。「わたしは呼ばなかった、わが子よ。もう一度横になりなさい。」サムエルは三度呼ばれ、三度同じように応えた。そこでエリは、その神秘的な呼び声が神の御声であることを確信した。主は、ご自分の選びのしもべである白髪の老人を差しおいて、幼子と語り合われたのである。これはそれ自体、エリとその家に対する、苦くも当然の叱責であった。『族長と預言者』581頁。

エリの家を背教の時代には「開かれた幻」はなく、そのころは主の言葉が“precious”であったからである。“precious”と訳されているヘブライ語の語は“rare”を意味する。1844年から1884年まで、ラオデキヤのアドベンチズムには「開かれた幻」が与えられていた。それはフィラデルフィアのミラー派運動の歴史の中で最初に確立され、1856年にはフィラデルフィアの運動がラオデキヤの運動へと移行したことを示し始めたが、「開かれた幻」はなお続いた。神は忍耐深くあわれみ深いからである。

そして1863年に、根本的真理に対する反逆が始まったが、「公開の幻視」は1884年まで続いた。すると、変化が生じた。エゼキエル書第8章では、四つの忌むべきことが段階的に深刻化していくものとして描かれている。1884年は、第一世代のほぼ終結と第二世代の始まりを示している。再臨運動の歴史は、1881年に、そして再び1882年に、反逆が二度にわたり顕著に増大したことを記録している。

1881年、総会会長（ジョージ・バトラー）は『Review and Herald』に一連の論説を執筆・掲載し、その中で聖書のある部分は他の部分よりも強く靈感を受けていると主張し、論説の結びでは実際に靈感を受けていない聖書の箇所を特定した。続いて1882年には、出版事業の指導者であり、当時は教育事業の指導者でもあったユライア・スミスが、ホワイト姉妹に将来の予言や過去の聖なる歴史が示されたときには彼女の言葉は靈感によるものだが、教会員の個人的な欠点を指摘する場合は、それは単なる彼女の人間的意見にすぎないと教え始めた。

1881年、欽定訳聖書の権威に対する公然たる攻撃が、サタンによって教会の会長を通じて仕掛けられ、翌年には、教育および出版事業の指導者が預言の霊の権威に対して同様の攻撃を仕掛けた。1884年以降については、証言によれば、その頃には公の幻視はなかった。1863年から1881年に至るまでの間に、反逆の矛先は聖書と預言の霊にまで及び、もはや単に土台を拒むことを表すだけのものではなくなっていた。

エゼキエル書第八章に示されている四つの忌むべきことは、エルサレムの指導層を表す長老たちによって行われた。ここでの長老たちは、1863年に法的な教会組織として発足したラオデキア的アドベンチズムの指導部を象徴している。その時点で Review and Herald 誌に一つの記事が掲載され、一部の歴史家はその著者をジェームズ・ホワイトに帰しているが、記事に付随する文書はむしろ実際の著者としてユライア・スミスを指し示している。いずれにせよ、エリコ再建に対する呪いはジェームズ・ホワイトによって明確に成就し、偽造の1863年図表を作成したのはユライア・スミスであった。1881年までには、総会の会長が聖書の完全な権威に異議を唱える記事を Review and Herald 誌に掲載しており、翌年にはユライア・スミスが「証の霊」の権威に対する攻撃を開始した。

守護者であるはずの古老たちが先頭に立ち、公然の攻撃を仕掛けたが、それはミラーの夢に表され、ハバククのものに図示された基礎的真理への攻撃から始まった。そこから彼らは、聖書の二人の証人と預言の霊を攻撃し始めた。同じ時期（1880年代初頭）には、健康事業の指導者であったジョン・H・ケログが、汎神論の心霊主義を教会の指導層に持ち込み始めた。1881年、ジェームズ・ホワイトは永眠し、ホワイト夫人は、教会の教育・健康・政治の組織体制の指導部による反逆が激化するただ中であつた。

1856年に与えられた、「七つの時」の増し加わった光であるあのメッセージ、そしてラオデキアへのメッセージは、退けられてしまっていた。そこで主は、1888年のミネアポリスでの総会において、ジョーンズ長老とワグナー長老によって提示されたメッセージを通して、その同じメッセージを繰り返そうとされた。彼らのメッセージは新しいものではなかったが、そのメッセージに反対した者たちに対してホワイト夫人が語ったとき、彼女は、反逆者たちが、ジョーンズとワグナーのメッセージに抗することこそ、古い道標、すなわち古い土台を守る自分たちの責務の表明であると信じていることを指摘した。彼

らの反逆は、1888年の時点で、彼らのもはや土台が何であるか—すなわち、基礎的な真理はキリストの義を表しているということ—を理解していなかったことを明らかにした。道標とウィリアム・ミラーの規則という文脈で、彼女はこう述べた：

私たちは、キリスト教の本質は何か、何が真理であるのか、私たちが受け継いだ信仰とは何か、そして聖書の規範—すなわち最高の権威から私たちに与えられた規範—とは何かを、自ら知っていなければならない。信仰の拠り所となる理由も、その事柄が真実であることを示す十分な証拠もないままに信じる人が多くいる。自分の先入観と調和する考えが示されると、彼らはたちまちそれを受け入れてしまう。原因から結果へと論理的に考えず、彼らの信仰には真の土台がないため、試練の時には、自分が砂の上に建てていたのだと知ることになる。

自分の現在の不完全な聖書理解に満足し、これで救いに十分だと思って安んじている者は、致命的な欺きの中に安住している。誤りを見分け、真理として押しつけられてきたあらゆる伝統や迷信を糾弾できるようにするための聖書的論拠を、十分に備えていない者が多い。サタンは、キリストの福音の単純さを損なおうとして、神の礼拝の中に自分自身の考えを持ち込んできた。現在の真理を信じていると主張する多くの者は、かつて聖徒たちに伝えられた信仰、すなわち「あなたがたのうちにおられるキリスト、栄光の望み」が何であるかを知らない。彼らは古い道標を擁護しているつもりでいるが、生ぬるく無関心である。自らの経験に織り込み、愛と信仰という真の徳を身につけるとはどういうことかを知らない。彼らは聖書を綿密に学ぶ者ではなく、怠惰で不注意である。聖書の箇所について意見の相違が生じると、目的をもって学ばず、何を信じるかを定めていないこれらの人々は、真理から離れ去る。私たちはすべての人に、神の真理を熱心に探求する必要性をしっかりと刻みつけるべきである。彼らが、何が真理であるかを自分が確かに知っているのだと知るためである。ある者は多くの知識を持つと主張し、自分の状態に満足しているが、彼らには、神を知ったことがない者と変わらないほど、働きへの熱も、神と、キリストが死なれた魂へのいっそうの熱烈な愛もない。彼らは、自分の魂に髓と脂のような滋養を取り入れる〔ために〕聖書を読むのではない。それが自分に語りかける神の御声であるとは感じない。しかし、もし私たちが救いの道を理解し、義の太陽の光を仰ぎ見たいのなら、目的をもって聖書を学ばなければならない。聖書の約束と預言は、贖いの神のご計画に栄光の明るい光を投げかけており、この壮大な真理が明確に理解されていないからである。

『1888年資料』403ページ

この記述は1888年当時の彼女の証言からのものであり、彼女は、反逆者たちがそれとは知らずに砂の上に土台を築いていると指摘している。彼女はこう述べている。「現在の真理を信じていると主張する多くの者は、かつて聖徒たちに授けられた信仰——あなたがたのうちにおられるキリスト、栄光の望み——が何であるかを知らない。彼らは自分たちは古い道標を守っていると思っているが、生ぬるく、無関心である。」彼女は、彼らが「生ぬるい」ゆえに、なおラオデキアの状態にあると指摘している。また彼女は、「かつて聖徒たちに授けられた信仰——あなたがたのうちにおられるキリスト、栄光の望み」を示している。キリストは永遠の岩であり、永遠の岩として、ミラーの夢の中の宝石を象徴している。

「警告が与えられました. 1842年、1843年、1844年にこのメッセージが与えられて以来、私たちが築いてきた信仰の土台を乱すものを、何一つ入り込ませてはなりません. 私はこのメッセージに関わっており、それ以来ずっと、神が私たちにお与えになった光に忠実に、世の前に立ってきました. 日々、切なる祈りをもって主を求め、光を求めながら、私たちの足が据えられたその土台から退くつもりはありません. 神が私にお与えになった光を、私が手放すと思いますか. それはとこしえの岩のようであるべきものです. 与えられて以来、ずっとそれが私を導いてきました。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年4月14日.

彼女が「彼らは原因から結果へと推論しない」と述べる時、彼女は反逆者、すなわちエゼキエルの古老たちの重要な実態を指摘している. 悪者は原因から結果へと推論することができないか、あるいはしようとしな. 1888年の総会会期の成り行きはあまりにも反逆的であったため、ホワイト姉妹は立ち去る決心をしたが、彼女の天使の案内者は、とどまってコラ、ダタン、アビラムの反逆の並行史を記録しなければならないと命じた. 古老たちの反逆は結果であり、その原因は、1856年に「七つの時」の光が増し加わるとともにもたらされたラオデキアのメッセージを拒否したことであり、さらにそれは1863年には土台に対する反逆へとエスカレートし、その結果、まず聖書、次いで「預言の霊」への攻撃へとつながり、あわせてケログの心霊主義が導入された.

もちろん、古来、歴史家たちは、反乱に関する真実を、くだらないものや伝統、慣習、作り話の数々で覆い隠してきた. なぜなら、その種の反乱に加担する者は常に証拠を隠そうとするからだ.

主からそのはかりごとを深く隠そうとし、行いを暗闇の中で行い、「誰が我々を見ているのか. 誰が我々を知っているのか」と言う者たちには災いあれ. イザヤ書
25章19節

その節でイザヤが語りかけている男たちは、彼が「エルサレムでこの民を治めているあざける者たち」と呼ぶ者たちであり、エゼキエル書八章で民の守護者であるはずだった同じ長老たちである. エゼキエルの証言では、アドベンチズムの第二世代を示す第二の忌むべき事のときに、彼らはイザヤのあざける者たちが投げかける問いに、こう言って答える——「主は我らを見ておられない. 主は地を見捨てられた」(Ezekiel 8:12).

1888年に至り、そこで起きた反乱の真実を覆い隠そうとする歴史修正主義者には、「災いあれ」と宣告されている.

次回の記事でこの研究を続けます.

ミネアポリスでの集会について、あなたに申し上げなければなりません. 私は、横行していた強い反対の霊を見て感じたので、一度はその集会を離れる決心をしました. モリソン兄弟とニコラ兄弟に支配的な力をもって働いていたその霊を、私は片時たりとも認めることができませんでした. あなたがどのような霊に属していたかについて、私は少しも疑いません. 確かにそれは神の霊ではありませんでしたし、あなたがこの惑わしの中にとどまり続けられないように、今あなたに書いています.

私がミネアポリスにこれ以上とどまらないと決心したその翌晩、夢であったのか夜の幻であったのか—どちらであったかは確かには言えないが—、背が高く威厳ある人物が私に一つのメッセージをもたらし、私が自分の任務の持ち場に立つことが神の御心であり、神ご自身が私の助けとなって、神がお与えになる言葉を私が語れるよう支えてくださるのだと明らかにしてくれた。彼は言った。「この働きのために主はあなたを立てられた。主の永遠の御腕があなたの下にある。この集会では、生か死かを分ける決断が下されるだろう。誰一人として滅びなければならぬわけではないが、霊的な高慢と自己信頼が戸を閉ざし、イエスとその聖霊の力が受け入れられないようにしてしまう。彼らには、欺きから解かれ、悔い改め、罪を告白し、キリストのもとに来て回心し、主が彼らを癒やして下さるために、もう一度の機会が与えられる。」

彼は言った。「わたしに従いなさい。」私は案内者に従い、彼は私を、兄弟たちが住まいとしているさまざまな家々へと導いた。そして彼は言った。「ここで語られる言葉に耳を傾けなさい。これらは記録の書に記されており、上からの知恵の霊によらず、上から来るのではなく下からの霊によってなされるこのわざに加わるすべての者に対して、これらの言葉は断罪の力を及ぼすであろう。」

私は、それを口にした当人たちが皆、恥じ入るべきような言葉が発せられるのを聞いた。皮肉な言葉が次々と交わされ、彼らの兄弟であるA. T. Jones、E. J. Waggoner、Willie C. White、そして私を嘲った。神の御前で魂をへりくだらせ、自らの心を整える務めにこそ携わっているべき人々によって、私の立場と私の働きについて好き勝手な論評が加えられた。真理に何の根拠もない、彼らの兄弟やその働きについての想像上の不正や想像から出た言説を抱えて思い悩むこと、そして懐疑心と疑念と不信の結果として疑い、辛辣なことを語り書き立てることに、どうやら心惹かれていたかのようであった。

私の案内者は言った。「これはイエス・キリストに敵対するものとして書物に記されている。この霊は、キリストの御霊、すなわち真理の御霊と調和することができない。彼らは反抗の霊に酔いしれ、酔漢と同じく、自分たちの言葉や行為をどの霊が支配しているのかをわきまえない。この罪はとりわけ神の御前に忌むべきものである。この霊は、真理と義の御霊に似ても似つかない。ちょうど、世界の贖い主であるキリストに対して疑い、批判し、密偵となるために結託するようユダヤ人を駆り立てた霊が、真理と義の御霊に少しも似ていなかったのと同じである。」

私の導き手から、キリストなき語り、すなわち、その言葉を促した霊を露わにする下卑たざれごとには、目撃者がいたと知らされた。彼らが自分の部屋に入ったとき、悪しき天使が彼らと共に入ってきた。彼らはキリストの御霊に戸を閉ざし、その御声に耳を傾けようとしなかったからである。神のみ前に魂をへりくだらせることはなかった。祈りの声はめったに聞かれず、批判や誇張、仮定や推測、ねたみや嫉妬、悪意ある邪推や虚偽の非難が横行していた。もし彼らの目が開かれていたなら、彼らを恐れさせるもの、すなわち悪しき天使の勝ち誇るありさまを見ただろう。そしてまた、一語一句を聞き取り、それらの言葉を天の書に記録していた見張る者も見ただろう。

「そのとき私は、この時点では、教理上の諸点に関する立場や何が真理であるかについていかなる決定を下すのも、公正な探究の精神を期待するのも無益であると知らされた。というのも、彼らが受け入れてきたどの点や立場についても、ユダヤ人がそう

であったのと同様に、考えを少しも変えることを許さない結託が形成されていたからである。私の導き手から多くのことが語られたが、それを書き記す自由は私にはない。気がつくや、私は悲しみと苦悩の思いのうちにベッドで起き上がり座っていた。また、会合の終わりまで自分の務めの持ち場に立ち続け、その後で、どのように動き、どの道を進むべきかを告げる神の御霊の指示を待とうという堅い決意も抱いていた。」 『1888年資料』 277、278頁。